

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(25) 平成13年6月15日

遠江国地誌シリーズ(その1)

『遠江国風土記伝』(S230-2)

『遠江国風土記伝』は全13巻の地誌で、寛政11(1799)年に内山真龍(1740~1821)によって著され、完成までに約10年かかっています。遠江国地誌の原典とも言われ、『駿河記』の葉原黙齋、『掛川誌稿』の齋田茂先らにも影響を与えています。巻ごとに、浜名、敷智、引佐、麗玉、長上、磐田、豊田、山香、周智、山名、佐野、城飼、榛原の遠江13郡が記載されています。

著者の真龍は遠江の生んだ国学者で、豊田郡大谷村(現 天竜市)の名主でした。21歳の時、賀茂真淵に入門して真龍と称し、仕事の合間に勉学に励み、真淵には、「熱心ではあるが気性がはやりすぎる」と評されていました。真龍は40代後半より精力的に著作に励み、著作は35部、114巻にも達します。『遠江国風土記伝』が完成したのは59歳の時で、他にも多くの地誌や歌集を著しています。また、真龍は100名以上の門人を抱え、神官など一部町人層にとどまっていた遠州国学を、郷村の内部まで浸透させて遠州国学の基礎を築いたのでした。

当館では江戸期の写本と言われる12冊を所蔵しており、『遠江国風土記伝』全13巻が漢文体で収められています。1冊ごとに12支の名が付けられており「子」より「亥」まであります。ほとんど1冊ごとに1つの巻が収まっていますが、寅の冊では引佐と麗玉が、卯の冊では長上と磐田が、豊田は辰の冊と巳の冊に上・下として分かれて記載されています。

子の冊には『遠江国風土記伝』の巻の1が収められており、序文、総序、浜名郡について書かれています。序文を読み下し文で一部紹介しますと、「前略～近く藤原重道という者あり、遠江誌を記す、惜しいかな、果たさずして下世す、誌もまた従って亡ぶ、今選ぶところは国中13郡なり、毎郡山川原野の風及び古老の説を表し、旧記を引いて之を註し、遠江国風土記伝と号す。」ここには『遠江誌』を編さん途中で死去した藤原重道の後を受けて、『遠江国風土記伝』を著したことが述べられています。真龍には遠江国の地誌を何としても完成させるという強い決意があったと思われる。総序には遠江国の東西南北の長さ、国名の由来、石高などが簡潔に記されています。

郡ごとの記述の仕方は浜名郡から榛原郡まで共通しており、まず郡名の由来、郡境、石高などを記し、郡内の郷村ごとに、所在する村々、寺社、山水、旧跡などを簡潔に説明して、さらに寺社、山水、旧跡などを個々にくわしく説明しています。引用、参考文献は、先行した『遠江誌』をはじめ、『古事記』、『日本書紀』などの正史、『倭名抄』、歌集、紀行、戦記物など100近くにも及び、古老の言葉なども載せてあります。また巻の所々に図がありますが、郡図は『正保国絵図』を、城跡図などは伝来の古図や実地踏査した図を載せてあります。また石高は『元禄高帳』から引用しています。

『遠江国風土記伝』の巻末には脱稿した年月日が記されていますが、完成後1年あまりで13人の門人や友人によって写本され、幕府の役人たちにも広まっています。明治から現在まで4回も刊本になっており、『遠江国風土記伝』は遠江国の歴史をひもとく際の基本資料のひとつです。

【参考図書】

『内山真龍の研究』(120/6A)

『浜松市史 2』(S236/21)